ソーシャルスキルトレーニングの
理 解 と 指 導

総合教育センター
特別支援教育担当

Ⅰ　ソーシャルスキルについて

1　ソーシャルスキルをめぐる動向

ソーシャルは「人間関係に関すること」を意味し、スキルは「知識や経験に裏打ちされた技術」を意味します。心理学では、ソーシャルスキルを「他者との良好な関係を形成し、それを維持していくための知識や技術の総称」とし、環境や学習によって変化するものととらえています。教育場面では、学校生活を送るうえで必要な知識や技術も含んでとらえることが多いようです。

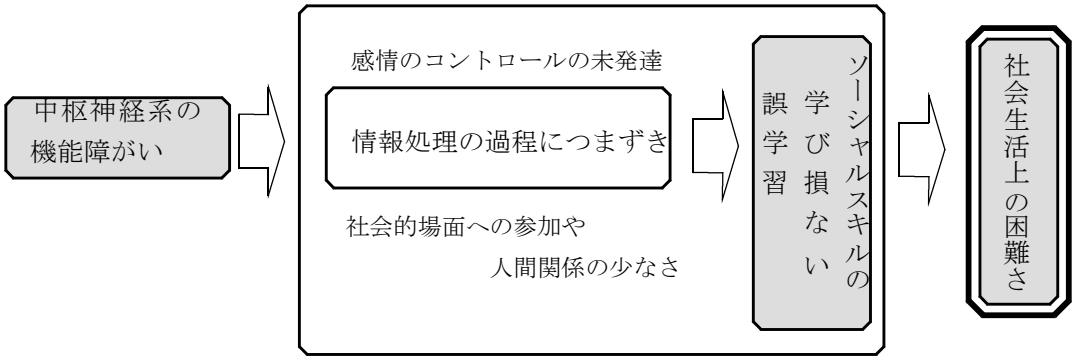
小林（2005）は、子どもたちのソーシャルスキルについて「ソーシャルスキルは、多くのモデルを見て、その振る舞いを学ぶ。そして、仲間との数多くのやりとりを通して、学んだスキルを洗練されたものにしていく。集団遊びが消え、この学びの機会が、急激に失われてしまった。そのため、地域の場で、自然に学んでいた集団を作ることや、人間関係を調整することが総じて下手になった。そして、集団生活が負担になり、集団でいることに、居心地の悪さを感じる子どもたちが増えた。このように、それまでは、地域にあった自然にソーシャルスキルをはぐくむ構造が消え、子どもたちのソーシャルスキルが全般に下手になったのである。」と述べています。

また、厚生労働省の委託事業である「ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究報告書」（財団法人社会経済生産性本部. 2007）によると、人間関係への不安が80.9％と際立っています。さらに、対面コミュニケーションの苦手意識や、面接や電話、対人関係を苦手としている方が６割強存在し、ソーシャルスキルが十分に身についていないことがうかがわれます。

2　発達障がいとソーシャルスキル

発達障がい（ＬＤ、ＡＤＨＤ、高機能自閉症等）は、脳の中枢神経系の機能障がいがあり、ソーシャルスキルの誤りにも大きな影響を与えています。

また、このことが要因となり、対人関係が少なくなることや、社会的場面への参加が少なくなり、ソーシャルスキルの「学び損ない」「誤学習」「学べない」という負の連鎖に陥りやすくなります。



社会生活上の困難さへの過程

3　ソーシャルスキルトレーニングの必要性

発達障がいをもつ児童生徒の多くは、ソーシャルスキルの「学び損ない」「誤学習」「学べない」という課題を抱えています。したがって、ソーシャルスキルの指導を行っていくことが必要です。

また、発達障がいをもつ児童生徒だけではなく、周囲の児童生徒についてもソーシャルスキルトレーニングを行っていくことが大切です。なぜならば、発達障がいをもつ児童生徒を受け入れるためのソーシャルスキルが必要になるからです。

発達障がいをもつ児童生徒に対してのソーシャルスキルトレーニングと、その児童生徒を支えている集団あるいは、一人一人へのソーシャルスキルトレーニングが必要なのです。

Ⅱ　ソーシャルスキルトレーニングの概要

ソーシャルスキルトレーニングは、医療分野（精神科医療等）に導入され、日本では、1980年代後半頃から行われるようになってきました。現在では、社会復帰訓練や矯正教育、学校教育等へと幅広い領域で扱われ発展してきました。

ソーシャルスキルトレーニングで扱う具体的内容は、児童生徒の様子、文化、年齢、性別等により異なります。さらに、目的や対象、形態等の組み合わせにより、その活動は数限りなく考えられます。

目的・・・　治療的　予防的　積極的

形態・・・　構成的　非構成的

対象・・・　個　人　小集団　集　団

内容・・・　他者理解　自己表現　感情調整　集団参加　授業参加

具体的内容

他者理解	自己表現	感情調整	集団参加	授業参加
表情による感情	表情	喜び	聞き方（視線を含む）	椅子の座り方
言葉による感情	言葉（抑揚等）	怒り	整列	聞き方
場面による感情	返事	悲しみ	歩き方	発表
ジェスチャー	あいさつ	楽しさ	着替え	ノートのとり方
特徴	感謝	予期	トイレ	話し合い
立場（身分等）	謝罪		食事	
	要求		清掃	
	拒否		所有物	
	賛辞		準備	
	依頼		提出	
	誘い		約束	
	伝達		整理整頓	
	質問		役割の遂行	
	回答		時間の厳守	
	議論		依頼・指示対応	
	ことば遣い		余暇(遊び)	
	ジェスチャー		話題の共有	
	特徴		他者との距離	
			対立解決	

活動

絵カード	４コマ漫画	紙芝居
ＶＴＲ	図	ゲーム
ロールプレイ	シミュレーション	コンピュータ
	劇指導	実際の日常生活

ソーシャルスキルトレーニングを構成する要素のイメージ

1　目 的

治療的　予防的　積極的

「治療的」とは、人間関係に関することで、何らかの不都合が生じた際に、それを改善するために行うためのソーシャルスキルトレーニングです。教師あるいは児童生徒のいずれかが、目的意識をもって設定することになります。その思いを共通確認して取り組みます。

「予防的」とは、集団において不適応状態にならないように、一人一人の特性を考えて行うソーシャルスキルトレーニングです。さらに「積極的」な目的意識をもち、児童生徒が、人とかかわる力をより向上させるような、開発的な対応を展開していきます。

2　形 態

構成的　非構成的

「構成的」とは、先に児童生徒に必要なソーシャルスキルの具体的内容を指導したうえで、その具体的内容を含む活動を行うことです。例えば、「あいさつ」という具体的内容を指導したうえで、「あいさつジャンケン列車」などのゲームをするような活動が考えられます。「構成的」な形態のよさとして、重点的に指導したい具体的内容について扱うことができたり、あらかじめ学んだ具体的内容を生かすゲームであることから安定した気持ちで取り組んだりすることがあげられます。

「非構成的」とは、日常生活のなかで、様々なソーシャルスキルの具体的内容を体験したり、その時々に応じながら、指導者や友達等とのかかわりの中で新たなスキルを学んでいくことです。例えば、保健室に学級の友達の健康状態を伝える係活動に取り組むなかで「あいさつ」について学びます。より実際的な場面で行うことができるよさや、取り立てて時間を設定しなくても指導できるよさがあります。

それぞれの形態の長所を生かし、補いながら組み合わせて、指導を行っていくことが望ましいです。

3　対 象

個人　小集団　集団

問題行動をとる児童生徒に対しては、個人を対象としてソーシャルスキルトレーニングを行うことが必要です。そのときは、集団に対しても個人を受容するためのソーシャルスキルトレーニングを並行して行っていくことが大切です。

複数の児童生徒に対し目的や取り組む内容が同一である場合や、小集団での安定したかかわりやかかわる場面を確保する場合は、小集団でソーシャルスキルトレーニングを行う場合もあります。

ソーシャルスキルは、人とのかかわりの中で実現されたときに、学んだことの意味付け・価値付けがなされていくものです。そのためには、個人が学んだソーシャルスキルを受け入れるための、集団としてのソーシャルスキルを高めていくといった観点が大切であると考えられます。

対象が、個人であっても、集団であっても単発的なソーシャルスキルトレーニングであっては、効果がなかなかあがりません。学校生活全体をとおして、学んだことを発揮することができる環境を設定したり、その都度価値付けたり、指導したりしていくことも大切です。

4　内 容

他者理解　自己表現　感情調整　集団参加　授業参加

先に説明したとおり、ソーシャルスキルトレーニングで扱う具体的内容は、児童生徒の様子、生育歴、年齢、性別等により異なります。

本テキストでは、大きく「他者理解」「自己表現」「感情調整」「集団参加」「授業参加」の５つに分類しました。

さらに、具体的内容として、５３項目を設定していますが、これはあくまでも例示であり、児童生徒の様子や実際の学校生活から、増やしたり減らしたりしていくことが求められます。

5　活 動

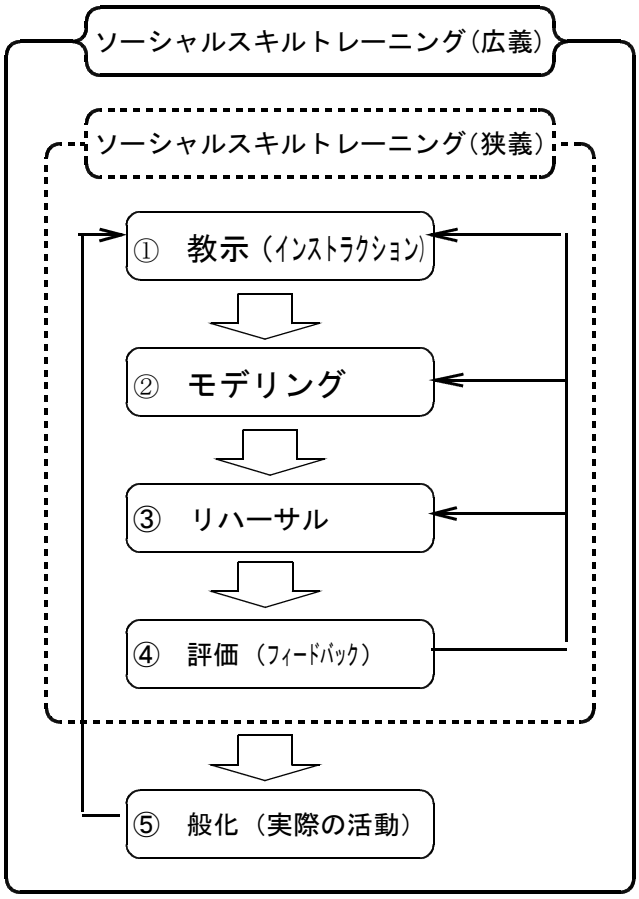
絵カード	４コマ漫画	紙芝居	ＶＴＲ
図	ロールプレイ	シミュレーション	劇指導
ゲーム	コンピュータ	実際の日常生活	

ソーシャルスキルトレーニングの流れや具体的な活動については、次項以降で扱います。

Ⅲ　ソーシャルスキルトレーニングの実際

1　ソーシャルスキルトレーニングの一般的な流れ

基本的には、以下の流れによりますが、それぞれの段階は補完的な関係にありますので、児童生徒の特性や具体的内容や場面によっては、様々に変化させていくという視点も大切です。



ソーシャルスキルトレーニングの流れ

①教示では、ソーシャルスキルトレーニングに対する目的意識の喚起を主眼とします。主に言語により「なぜ必要であるのか」「そのスキルがないと、どうなるのか」「そのスキルがあると、どうなるのか」などのことについて伝えます。

②モデリングでは、指導するスキルのモデル（手本）を示します。教師や友達が示すことや、写真、絵、ＶＴＲ等によって示すことができます。場合によっては、不適切なモデルを示すこともありますが、その印象を強く受け止めてしまうこともあるために、どのようなモデルがよいのか慎重に検討していきます。

③リハーサルでは、学んだスキルを繰り返し行います。絵カードや4コマ漫画、紙芝居、コンピュータ、認知行動療法的な図示等による言語・視覚リハーサルが考えられます。また、ロールプレイやシミュレーション、ゲーム等による行動リハーサルも考えられます。

④フィードバックでは、正しいときには誉め、不適切であるときは修正を行います。児童生徒にとっては、教師等による他者評価になりますが、目的意識を持続することにより、自己評価の可能性も大切にしていきたいものです。

⑤般化では、学んだスキルをリハーサル以外の場所で実行することができるようにします。ボトムアップあるいは、トップダウンのいずれであっても、どのような環境や手立てがあれば実行可能であるのか、指導者はもちろん、可能であれば児童生徒も一緒に検討していきます。

2　ソーシャルスキルトレーニングのポイント

（１）実際的な活動

ソーシャルスキルトレーニングは、教師による説話ではありません。十分な活動を通して学び、実際的な活動を通して活用していくことが大切です。

（２）段階を踏まえた指導

学んでいくソーシャルスキルが、児童生徒にとって高すぎると、なかなか習得することができません。具体的内容を細分化して習得状況を確認したり、支援の度合いを検討したりすることが大切です。

（３）成功体験による強化

成功することにより、児童生徒は学んだソーシャルスキルをさらに価値付けます(自己評価)。成功したことを自分自身で感じることも大切ですが、教師や友達による評価(他者評価)も大切です。

（４）個人と集団

ソーシャルスキルを、児童生徒個人の問題として扱いがちですが、その周りの集団が、その児童生徒のことをどのように受け止め、かかわっていくかといった視点で考えていくことが大切です。つまり、個人への指導と集団への指導を並行して行っていくことが大切なのです。

３　ソーシャルスキルトレーニング（狭義）の具体例（モデリングとリハーサルを中心に）

（１）ワークシートを用いたソーシャルスキルトレーニング①

友達が消しゴムを忘れてきて困っています
あなたは、どうしますか？

どうしよう？

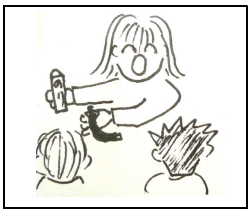
（２）ワークシートを用いたソーシャルスキルトレーニング②

どんなことが、おきましたか？	
どうしたらいいですか？	
どんなときに、おなじことがありそうですか？	

友達から、間違いを指摘されたときの対応をワークシートに書き込むことで、望ましい対応を考えます。
まず、どんなことが起きているのか状況を把握します。次に、望ましい行動を考え、さらに実際の生活を振り返り、活用できそうな場面を視野にいれます。

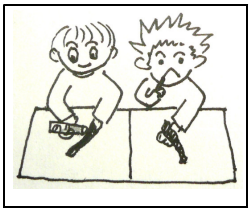
（３）４コマ漫画を用いたソーシャルスキルトレーニング

＜１コマ目＞　場面設定



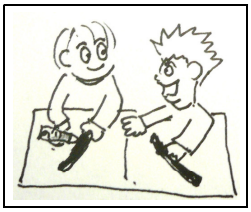
「『先生が、糊で貼りましょう。』って言っていますね。」

＜２コマ目＞　ハプニング



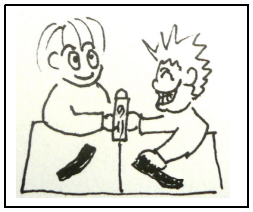
「あれ、○○さんは、糊がありませんね。」

＜３コマ目＞　望ましい行動



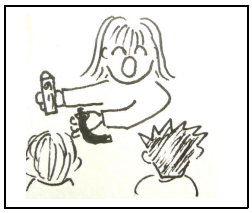
「○○さんは、どうしたらよいでしょうか。」「なるほど、それを書いてみましょう。」

＜４コマ目＞　他者の行動



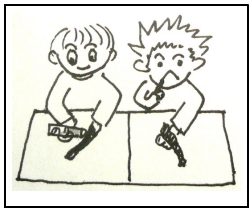
「△△さんは、どうすると思いますか。」「そうですね。それを書いてみましょう。」

＜１コマ目＞　場面設定



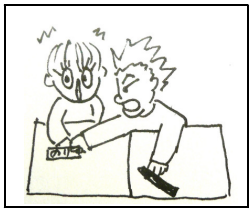
「『先生が、糊で貼りましょう。』って言っていますね。」

＜２コマ目＞　ハプニング



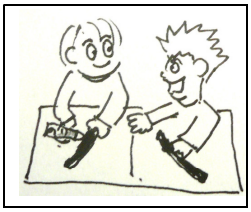
「あれ、○○さんは、糊がありませんね。」

＜３コマ目＞　望ましくない行動



「隣の△△さんの糊を取っちゃいました。△△さんは、びっくりしていますね。」

＜４コマ目＞　望ましい行動



「○○さんは、どうしたらよかったのでしょうか？」「なるほど、それを書いてみましょう。」

（４）写真や紙芝居を用いたソーシャルスキルトレーニング

４人の小集団で紙芝居や写真を用いた活動です。子どもたちが校長先生に宝の場所を尋ねて、校外へ宝探しに行くストーリーです。その中で出会う人とのかかわりを通して、一人一人が目指す姿を考えることができるよう、場面を設定しました。それぞれの場面は、個人のねらいにせまるものですが、小集団で学ぶことにより、望ましい会話や行動をみんなで考え、教え合うことも大切に扱いました。また、実際に教師を相手に話したり、行動したりすることにより、学んだことをさらに理解できるようにしました。

Ｌさんは、親しい友達や馴れた先生との会話が成り立ちます。しかし、相手を考えて言葉を選ぶという点において問題が見られました。紙芝居を使いながら、なぜ丁寧な言葉を使ったほうがよいのか理由を考える機会を設けました。

教　師　何と聞きますか。
Ｌさん　宝はどこにありますか。教えてください。
教　師　Ｍさんどうですか。
Ｍさん　いいねぇ。
教　師　先生言うので聞いてくださいね。宝どこ？
Ｌさん　だめ。
教　師　どうして　だめですか。
Ｌさん　なんか　変な態度。悪い態度。
Ｋさん　（小さな声でつぶやく）悪い態度。
教　師　どうして　いいお話の仕方をするのですか。
Ｌさん　おこられるから。う～ん、教えたくなくなるから。
教　師　なるほどね。いいお話の仕方をすると教えたくなるね。
　　それを「ていねい」と書きますね。
　―　「ていねいな話し方」と板書　―
教　師　校長先生じゃなくて、〇〇先生だったら？
Ｌさん　丁寧な話し方。
教　師　大人の人には丁寧のほうがいいね。
　　では、前でやってみましょう。

（５）すごろくゲームを用いたソーシャルスキルトレーニング（学んだスキル活用型）

カードを引いて、カードに書かれている課題（学んだスキルを活用する課題）に成功することができたら、サイコロを振ることができます。すごろくゲームを通して、楽しい雰囲気のなか学んだスキルを活用したり、繰り返したりすることができます。

（６）フルーツバスケットを用いたソーシャルスキルトレーニング（ゲームを通してのスキル獲得型）

「いろいろバスケット」「何でもバスケット」等の名称で呼ばれているゲームを通して、

＜他者理解→(特徴)＞

＜自己表現→(言葉、感謝、特徴)＞

＜集団参加→(聞き方、余暇、対立解決＞などのスキルを育てることができます。ただし、このゲームをすればソーシャルスキルトレーニングになるというものではなく、そこには、指導目標や手だて、評価等がなければなりません。「社会的な体験を提供する」という曖昧な方針だけではソーシャルスキルトレーニングにはなりません。

（７）ロールプレイを用いたソーシャルスキルトレーニング

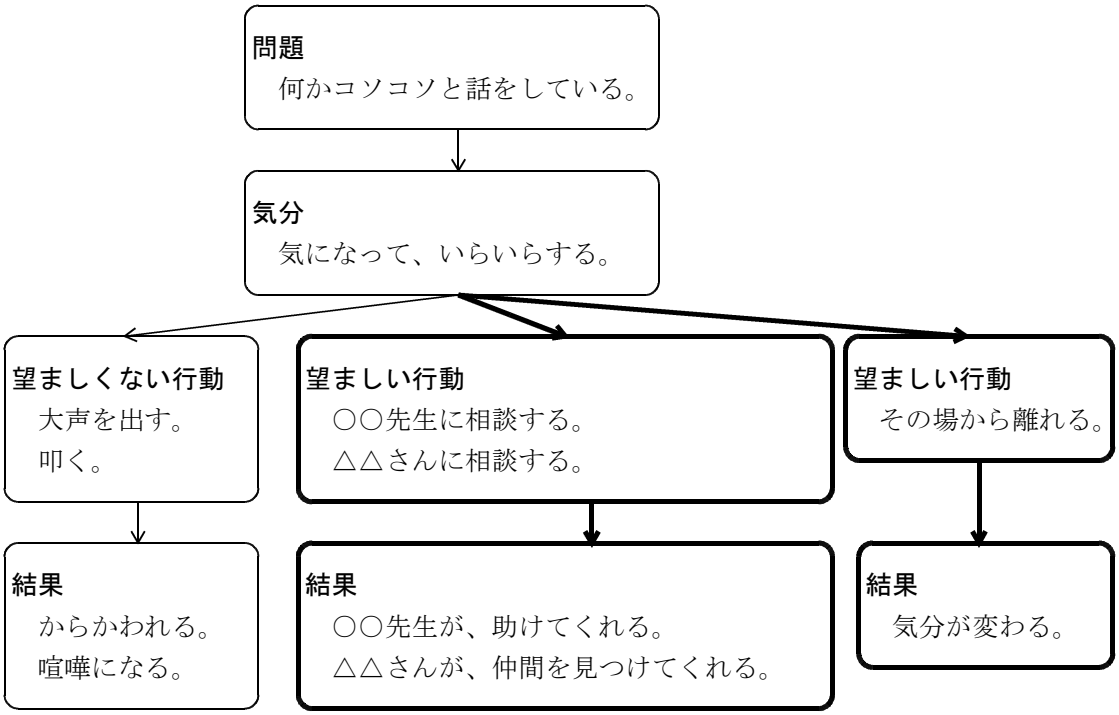
ロールプレイは、【モデルの提示（モデルリング）→行動のリハーサル（リハーサル）→評価(フィードバック)】という流れに基づきます。

ターゲットとする具体的内容が明確であれば、教示により目的意識を喚起することが大切です。

ターゲットが明確ではない場合は、あらかじめ場面を設定したうえで、いつものやり方で行動してもらいます。その後、正の評価（フィードバック）が起こってから、改善点を示したうえで【モデルの提示（モデルリング）→行動のリハーサル（リハーサル）→評価(フィードバック)】という流れが考えられます。

日常生活での般化を目指すためには、ロールプレイという基礎練習を積み重ね、日常生活で活用できるように教師が手だてをとることが大切です。このように教師が手立てをとったうえで活用することは、練習試合に例えることもできます。そのような積み重ねがあって、日常生活という実際の試合に一人で立ち向かうことができるのではないでしょうか。

（８）図を用いたソーシャルスキルトレーニング



（９）市販の絵カードを用いたソーシャルスキルトレーニング

＜１枚目＞

どうしているの（状況把握）

「掃除の時間にほうきを振り回して遊んでいる」

どうなりそう（結果予測）

「ほうきを振り回して危ない」

＜２枚目＞

どうなった（結果の確認）

「やっぱりけがをしちゃった」

どうすればよい（対処法予測）

「そうじの時はほうきを振り回さなければいい」

＜３枚目＞

どうだった（対処法確認）

「やっぱり、そうじの時はしっかりそうじして、剣を使って遊ぶなら危なくない紙で作って遊べばいい」

この連続絵カードには、このような「場面の認知と予測と対処」のほかに、次のような２種類あります。

○時間的、空間的な文脈の中での場面や相手の気持ちの認知

１枚目：どうしているの・・・・（状況把握）　：ゲームで負けて暴れている

２枚目：相手はどんな気持ち・・（気持ちの想像）：おもしろくなくなった

３枚目：どうすればよい・・・・（対処法確認）　：負けても最後までやってみる

○社会的な常識と許される範囲の行動の認知

１枚目：どうしたの・・・・・・（状況把握）　：勝手に遠くに行ってしまった

２枚目：どうなってしまったの・（結果の確認）　：迷子になった

３枚目：どうすれば良かった・・（対処法確認）　：勝手に一人で行動しない

（「ソーシャルスキルトレーニング（SST）絵カード」ことばと発達の学習室M著　エスコアールから引用）

（10）市販の書物を利用したソーシャルスキルトレーニング

「特別支援教育[実践]ソーシャルスキルマニュアル」上野一彦・岡田智編著(明治図書)など、市販の書物を使用します。

Ⅳ　事例から

ソーシャルスキルトレーニングを行っても、それが児童生徒の力につながらない場合があります。活動の質を問われる場合もありますが、その前に、目の前の児童生徒に、その内容や設定した活動が妥当であったのか、そして、その力はどのように活用されていくものだったのかを考えていなければならないのです。つまり、作戦を立てたうえで指導していくことが大切なのです。それを可能にするのが、指導計画です。可能であれば、指導計画は複数の教職員で立てていくことが望ましいです。

以下、実際の指導事例に沿いながら紹介します。

１　これまでの経緯

(1)　学校での状況

・小５のときに登校を渋ったが、学年が変わり登校するようになった

・中学校１年の運動会後、登校を渋りはじめる。教室に入れず保健室で過ごすようになり、保健室登校となる。学校では場面緘黙の状態

・はじめは養護教諭や学年の教師が対応していたが､保健室からの飛び出しや危険な行動があるため、管理職も含め全校で対応する方針に変更

(2)　教育相談の実施

・学校の申し出により、中学１年１学期に本人・保護者・学年長の三者で来所相談を行う

・その後も本人・保護者の希望があったときに継続相談を行っている。最初は本人と会話することは難しかったが、次第に慣れて学校以外の話題については話すようになった

・今年度に入り、保護者の希望によりソーシャルスキルトレーニング(以下ＳＳＴ)を実施することになった

２　実態把握

(1)　聞き取りの内容（Ｈ　年　月）

ア　Ａさん

・本人と会話をすることが難しかったが、遊びのなかでは笑った

イ　保護者

・対人関係がうまくいかない。仲のよい友達とは普通に話すし一緒に遊ぶ

・母親の言うことは聞かない。父親が叱ればそのときは言うことをきく

・勉強をまったくやらない。中学校の教科書をまだ見たことがない

ウ　学校

・全く学習に取り組めない。座っていられない

・養護教諭とは話すが、ほとんど話さない。養護教諭の仕事を邪魔する

・集団の場に参加できない。乱暴な行動がある

(2)　ＳＳＴチェック（Ｈ　年　月）

※チェック表は、「特別支援教育［実践］ソーシャルスキルマニュアル」編著者：上野一彦・岡田智（2006年、明治図書）のものを活用

(3)　課題

①　他者と適切にかかわったり自分の気持ちを表現したりすること

②　話す・聞く・書く・集中力を持続するなど、学習に必要な力の蓄積

３　必要な支援の検討（★はＳＳＴで重点的に行うこと）

・他者と体験を共有する・・一緒に遊ぶことで楽しい体験を共有する
（例）本人の好きな遊びを一緒に楽しむ

★他者と適切にかかわる・・ルールを守る、挨拶をする
（例）ルールのある遊びをする

・自尊感情を高める・・・・得意なことを生かし、認められる機会をつくる
（例）ボールを的に当てるこつや、ゲームの操作方法を教える

★課題に集中して取り組む・楽しんで取り組むことができるような課題を用意する
（例）終わるまでに一定時間かかる遊びや課題を行う

4　指導内容・指導方法

①ソーシャルスキル尺度※のまとめ

＜結果＞
集団行動…4
仲間関係…6
コミュニケーション…1

＜課題＞
集団行動
・状況に合わせた言葉遣い
・課題に集中して取り組む
・気持ちの切り替え・自分の行動の振り返り
・課題に取り組む際，計画を立てそれに沿って実行する

コミュニケーション
・適切に発表やスピーチをする
・自分から挨拶をする
・集団に向かって自分の考えを述べる
・悔しさや怒りを言葉で伝える
・困ったとき人に助けを求める
・話し合いの内容に沿った発言をする

②指導目標

＜短期目標＞
○自分の興味・関心のあることや遊びをとおして他者とかかわりをもつ
○遊びのルールを守る
○遊び又は休憩の時間に，10分程度着席することができる

＜長期目標＞
○言葉で適切に意思表示をすることができる
○一定の時間，着席して課題に取り組むことができる

③指導内容・指導方法

＜指導内容＞
①遊びのなかで他者とかかわることに慣れる
・本人が好きな遊び（ボールプール，TV ゲーム等）で楽しさを共有する
・操作を伴う遊び(ジェンガ，パズル等)を入れ，着席して集中する時間を作る
②遊びのなかで勝ったり負けたりする経験をする
・本人が遊びのルールを決める機会をつくる
・勝ち負けを明確にする
③挨拶をする
・来所時，帰宅時（「こんにちは」「さようなら」）
・休憩時(「いただきます」「ごちそうさま」)
・遊んでいる時(「ありがとう」「ごめんなさい」)

※ソーシャルスキル尺度
「特別支援教育［実践］ソーシャルスキルマニュアル」上野一彦・岡田智編著(明治図書)参照

5　指導計画と実践例

回	指　導　内　容	遊　び
1	○遊びのなかで他者とかかわることに慣れる ○遊びのなかで、勝ったり負けたりすることを体験する	ジェンガ 虫探し コンピュータ
2	○遊びのなかで他者とかかわることに慣れる ○遊びのなかで、勝ったり負けたりすることを体験する ○挨拶をする	ジェンガ 的当て 卓球 コンピュータ
3	○遊びのなかで他者とかかわることに慣れる ○遊びのなかで、勝ったり負けたりすることを体験する ○挨拶をする ○一定時間着席する	ストラックアウト バッティングゲーム ジェンガ パズル コンピュータ
4	○遊びのなかで他者とかかわることに慣れる ○遊びのなかで、勝ったり負けたりすることを体験する ○挨拶をする ○一定時間着席して課題に取り組む	風船バレー キャッチボール ドミノ倒し パズル
5	○遊びのなかで他者とかかわることに慣れる ○遊びのなかで、勝ったり負けたりすることを体験する ○挨拶をする ○一定時間着して課題に取り組む	サッカー キャッチボール ボードゲーム コンピュータ

(1)　第１回の流れ

＜目標＞○遊びのなかで他者とかかわることに慣れる

○遊びのルールを守る

段階	活動の流れ　◎今日の重点	指導・支援の内容	留意点
導入 15 分	ウォーミングアップ 1　じゃんけんチャンバラをする （◎遊びのなかで他者とかかわる）	・チャンバラの竹刀を作る作業を取り入れ，手指の器用さや作業への意欲を把握する ・チャンバラの遊びを説明し，遊ぶ	・作り方を絵と文で提示する ・作業は簡単にする
展 開 40 分	課題提示 2　好きな遊びをする （◎遊びのルールを守る） 3　中庭散策をする 4　休憩する 5　好きな遊びをする （◎遊びのなかで他者とかかわる）	・ポカポンで勝ち負けのある遊びをする ・3輪車や台車で，体を使った遊びをする ・中庭で虫探しをするが見つからず，池の鯉探しに変更。その後，花びらすくいに変更 ・花びらすくいに使った道具を片づける ・おやつを食べる時に，挨拶する ・フィードバックは機会を捉えその都度行う	・動的な遊びを多く取り入れる ・遊びの途中で興味が移ったときは，役割を与える ・何か手伝ったり教えたりしたときはその場ですぐほめる
終末 5 分	後片づけ 6　遊んだ道具を片づける	・自分が使った物はもとの場所に片づけるよう促す ・帰りの挨拶を促す（無理強いはしない）	・保護者に片づけをきちんとしていることを知らせ，保護者からもほめてもらう

(2)　第３回の流れ

＜目標＞○遊びのなかで他者とかかわることに慣れる

○遊びのルールを守る

○一定時間着席することができる

段階	活動の流れ　◎今日の重点	指導・支援の内容	留意点
導入 10 分	ウォーミングアップ 1　ストラックアウトゲームをする （◎遊びのルールを守る）	・順番やルールを決め，時々確認する ・誰が一番多く板を落としたか確認し，勝ち負けを決める	・ルールは変わってもよいが，相談してから変えることを話す
展 開 45 分	課題提示 2　バッティングゲームをする （◎遊びのなかで他者とかかわる） 3　ジェンガをする （◎遊びのなかで他者とかかわる ◎一定時間着席することができる） 4　休憩する	・バッティングゲームのルールを確認する ・フィードバックは機会を捉えその都度行い自信をもたせる ・座って行うゲームをいくつか準備しておく ・パズル（タングラム）をやってみるよう誘う ・お茶の準備を手伝うよう頼み，仕事の機会をつくる	・目に当たらないよう留意する ・課題につながる遊びを取り入れる ・食べ終わったら席を立ってもよいことを先に話しておく
終末 5分	後片づけ 5　お茶の道具を片づける	・「ごちそうさま」の挨拶を促し，一緒に言う ・帰りの挨拶を促す（無理強いはしない）	

６　変容

◎特定の遊びの時には１０分間着席できるようになった

◎遊びのなかで、相手に教えたり手伝ったりすることを進んで行うことが増えた

◎自分の不得意なことについて、少しだが話すことができるようになった

７　今後の課題

・「おはよう」「さようなら」などの挨拶をする

・自分が遊びにあきても、他の人が楽しんでいるときは待とうとする

・本人の興味関心に合っていて、作業や課題につながる遊びを取り入れる

【主な引用・参考文献】

「ＬＤ・ＡＤＨＤ・高機能自閉症の子どもの指導ガイド」
独立行政法人国立特殊教育総合研究所　東洋館出版社
「発達障害の子がいるクラスの授業・学級経営の工夫」
小島道生・宇野宏幸・井澤信三編著　明治図書
「通常学級の特別支援　今日からできる！40の提案」　佐藤慎二著　日本文化科学社

「教室でできる特別支援教育のアイディア　小学校編」　月森久江編集　図書文化社

「教室でできる特別支援教育のアイディア　中学校編」　月森久江編集　図書文化社

「特別支援教育［実践］ソーシャルスキルマニュアル」　上野一彦・岡田智編著　明治図書

「高機能自閉症・アスペルガー障害・ＡＤＨＤ・ＬＤの子のＳＳＴの進め方」
田中和代・岩佐亜紀著　黎明書房
「ＬＤ・ＡＤＨＤへのソーシャルスキルトレーニング」
小貫悟・名越斉子・三和彩著　日本文化科学社
「学校におけるＳＳＴ実践ガイド」　佐藤正二・佐藤容子編著　金剛出版

「ソーシャルスキルトレーニング（ＳＳＴ）絵カード」　ことばと発達の学習室M　エスコアール

「ＡＳＤの認知特性から見た『ソーシャルストーリーによる支援』の意味」
キャロル・グレイ、アビー・リー・ホワイト編著　安達潤監訳　スペクトラム出版社
「ソーシャルスキル教育で子どもが変わる　小学校」
国分康孝監修　小林正幸・相川充編著　図書文化社
「いま子どもたちに育てたい　学級ソーシャルスキル」
河村茂雄・品田笑子・藤村一夫編著　図書文化社
「ソーシャルストーリーブック」　キャロル・グレイ編著　服巻智子監訳　かもがわ出版

「お母さんと先生が書く　ソーシャルストーリー」
キャロル・グレイ編著　服巻智子監訳　かもがわ出版
「ＲＤＩ対人関係発達指導法」　スティーブン・Ｅ・ガットステイン著　杉山登志郎・小野次朗監修
かもがわ出版
「知的障害・自閉症の方への　地域生活支援ガイド」　門田光司他著　中央法規出版

「自閉症スペクトラムへのソーシャルスキルプログラム：幼児期から青年期までの総合的アプローチ」　スペクトラム出版社

「俺ルール！」　ニキ・リンコ　花風社

「発達の遅れと教育　第579号」　全日本特別支援教育研究連盟　日本文化科学社

「ソーシャルスキルからライフスキルトレーニングへの挑戦　実践障害児教育　第394号～405号」
小貫悟　学習研究社
「ニートの状態にある若年者の実態及び支援策に関する調査研究報告書」
財団法人社会経済生産性本部
「盛岡市立仁王小学校研究実践収録」　盛岡市立仁王小学校